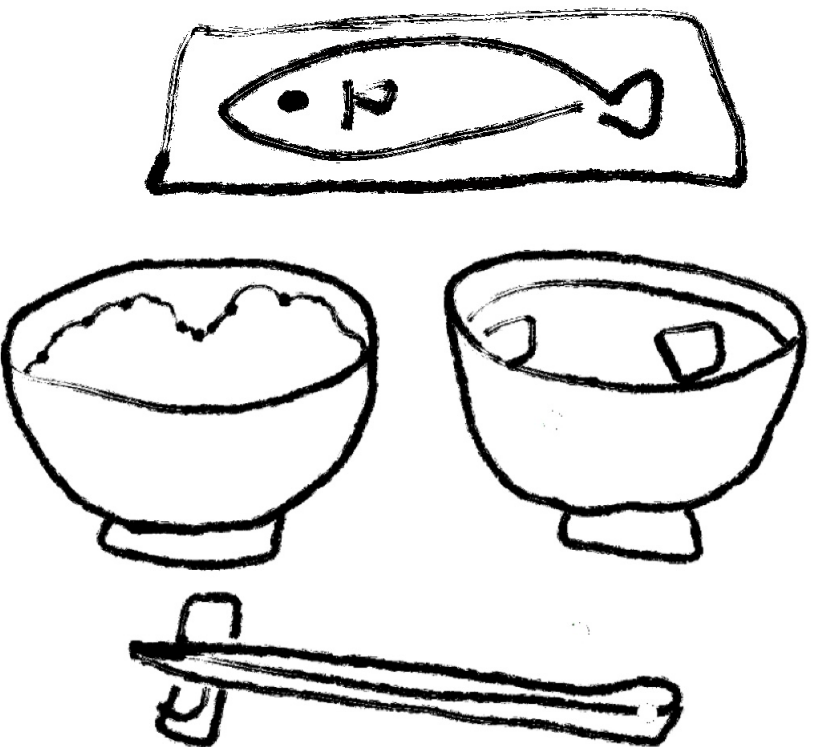


横光利一

蛾はえんがすんがるる



お

登場人物

彼

友人Ⅰ（Ⅰ）

哲子

女

妻

◆妻が亡くなった直後。妻の血を吸う蚊を眺める。
◆ナレーター

とうとう 彼の妻は死んだ。彼は全くぼんやりとして、妻の顔にかかっている白い布を眺めていた。昨夜 妻の血を吸った蚊がまだ生きて壁にとまっていた。

彼は部屋に鍵をかけたまま 長らくそこから出なかった。彼は蚊が腹に妻の血を蓄えて飛んでいるのを見ると、妻の死骸よりも、蚊の腹の中で、まだ生きている妻の血に胸がときめくを感じた。

◆妻の家に身を寄せている。無気力で、出歩く。
◆ナレーター・彼

彼は家をたたむと一時妻の家へ行っていた。彼はそこから日金のある間、気力を引き立てるために自動車を乗り廻して出歩いていた。しかし、彼は妻の葬に示してくれた多くの知己の好意を思い出すと、それにまだ一本の礼状さえ出してない自分のだらしなさが、突然ぼんやりした心の上へ重々しくのしかかって来た。

彼 「とにかく今は赦して貰いたい。俺は、今は何も出来ないんだ。赦してくれ。赦してくれ。」

彼はそう呟きながら、またふらふら自動車に乗り歩き、夜遅く妻の家へ疲れた身体で帰って来た。しかし、さて寝ようとすると、いつも義妹の身体がひとり蚊帳の中で青白くぐったりと眠っていた。

◆妻の家から恩師の家へ。蛾に出会う。
◆ナレーター・彼

彼はだんだん 義妹の身体が恐くなった。或る日、彼は黙って妻の家から逃げ出した。全く彼の行為は、彼女の家人にとって疑わしいことに相違なかった。しかし、彼としてみればその場合それ以外の方法を考え出すことは出来なかった。

彼は 新らしい生活の荷物として、先ず軽い歯ブラシとタオルとを買って恩師の家へよった。そこで彼は 好意ある恩師の言葉のままに暫くそこに落ちつくことにした。

その夜 彼は寝ようとして寝巻を着替えにかかると、不意に一疋の白い蛾が粉を飛ばせて彼の頬へ突きあたった。彼は、はッしと 掌で蛾を打った。蛾は彼に打ち落とされたまま、暫く苦しそうにばたばた 重厚な羽根で 畳の上を叩いていた。と、どこに力があつたのか、突如として 蛾はまた彼を目がけて 奇怪な速さで突きかかって来た。彼は ひらりと身を低くめた。蛾は 障子の棧にあたると 再びそこから彼の腰を睨って飛びかかった。

彼 「此奴、何者だッ。」
と 彼は思った。彼は 直ぐまた蛾を 掌で打ち降ろすと、部屋の隅に突き立ったまま 暫く蛾の姿を眺めていた。

◆旅に出て空を眺める。ホテルに蛾が現れる。
◆ナレーター・彼

次の日、彼はぶらりと旅に出た。彼は此の頃漸く自然の美しさが彼なりに分りかけて来たように思われた。彼は物を見るとき、なるだけその物の形だけを見るようにと心掛けた。形だけを見ていると、いかに些細な物体にもそれ相応の品位と性格とがあった。そう云う彼の物の見方に一番多く見られていたのは、彼の亡くなった妻であった。凡そいかなる物の観じ方があるとも、死は形が亡くなると云うことにちがいがなかった。彼の常に一番眼に触れていた形である空と妻との二つのうち、最も美妙に動き続けて茫々たる空の倦怠を破っていた妻の形が、俄に彼の眼界から無くなったと云うことは、とにかくこれから空漠たる空のみ絶えず彼の相對として眼に触れると云う予想からばかりでも、彼にとって此の生活と云う風景は全く色褪せた代物であった。

彼は旅行に出ようとして恩師の家の門を出ると、もういきなり疲労を感じた。彼は直ぐそのまま同じ街のホテルへ行つてベッドの上へ仰向きに寝た。

彼 「死とは何だ。死とは？」

しかし、どうして左様にわれわれは死を考えねばならぬのか――

彼は自分の疑問に逆手を打つと寝て了った。それから彼は夜中に眼が醒めた。すると、ぼんやり彼の見ている真上の蚊帳の腹の上で、一疋の蛾が、彼の寝ている匂いを嗅ぐように羽根を揃えてじっとしていた。

◆海を眺める。蛾を妻だと思い始める。

◆ナレーター・彼・I

彼は 次つぎの日ひ、友人達ゆうじんたちの多くおおいる海岸町かいがんまちへ行いってみた。その海岸かいがんでは、裸らたい体の男女だんじょの群むれが 輝かがやく大きな海岸線かいがんせんにまつわりついて 華はなやかに戯たわむれていた。そこは全まったく別世界べっせかいだ。

彼 「これは生きています。」

と彼は思おもった。

彼 「青春せいしゅんとは 有あり難がたい。」

彼は 思おもわず双もろ手を空そらに上あげたくなつた。いかに夫婦生活ふうふせいが牢獄ろうごくであろうとも、彼かれは一度妻いちどつまの健康けんこうな身体からだを抱だいて 人並ひとなみに此この海うみの中なかを 快活かいかつに泳およいでみたかつた。もし出来得できうべくんば、妻つまをして 悄然しょうぜんと自分じぶんの影かげに 佇たたずませずに、群むらがる男おとこの裸らたい体なかの中なかへ 澆刺はつらつと 馳かけ込こませ、閃ひらめく彼女かのじょの肉にく体たいから 爽さわやかな興奮こうふんを感じかんじたかつた。

その夜よる、彼かれは 生うまれて初はじめての夏なつの多彩たさいな海岸かいがんに眩惑げんわくされたまま、久ひさし振ぶりに生々いきいきとしていた。が、さて寝ねようとする、また一疋いっぴきの大きな白しろい蛾がが 彼かれの肩かたさきにとまっていた。

彼 「これはおかしい。」

と彼は思おもった。

彼は 暫しばらく蛾がをじつと見詰みつめて立たっていた。

彼 「これは妻つまだ。」

ふと彼かれはそう思おもった。すると、俄にわかに、前ぜん々ぜん夜やから引ひき続つづいて彼かれの 周しゅう困いを舞まい続つづけて来きた蛾がの姿すがたが、恋々れんれんとした妻つまの心こころの迷まよいのように

おも
思われ出した。

かれ
彼より先に床の上へ寝転んで 彼の様子を見ていた友人の I は、
きゅう
急に起き上がった。

I 「何んだ、蛾か。」

彼 「蛾だ。」

I 「よし。」

と I は云うと、いきなり蛾をひっつか
攫んだ。

彼 「どうするんだ？」

I 「殺すんだ。」

彼 「よしてくれ。」

と 彼は強く云った。

I は 蛾を握ったまま 暫く彼の峻しい顔を眺めていた。彼は
此の不意に起きて来た自分の気持ちも 勿論知ろう筈もない I の
ふしぎ
不思議そうな顔に 好意を感じた。

彼 「此奴は 俺の死んだ家内なんだよ。紙で包んでそっと捨てて
やってくれないか。」

I 「よしよし」

と I は 笑いながら穏やかに云うと、蛾を窓の外へ捨てて了った。
かれ
彼は床の上へ寝ながら、どうして妻が自分に蛾を彼女だと思わせるのか
と 考えた。もつとも 彼自身を彼だと思ふのと、蛾を妻だと思ふのは
そう大した変りはなからう筈なのに、しかし、それにしても わざわざ
いま
今の場合、蛾を特に自分の妻だと思ふ自分の気持ちが彼には 奇怪なことに
おも
思われてならなかった。

◆蛾を妻だと強く思うようになる。

◆ナレーター・彼・妻

彼は 一週間もするともう 華やかな海岸線から倦いて来た。そこで波に洗われている裸体の人々の形は、彼にとって別にあの倦怠極まる空の形を変化さすほど、それほど魅力のある何物でもないのが分つてくると、彼はまたぼんやりと 恩師の家へ帰って来た。

彼はここでも、夜いよいよ寝ようとするとき 習慣的に蛾が身の周囲にいないかで見回した。すると、いつの夜でもどこかに必ず定まっているように、また 白い一疋の蛾がちゃんと 彼の頭の横で待っていた。

彼 「実に不思議だ。これは、しかし、全く不思議な奴だ。おい。」
と彼は云った。

彼は 蛾に近いかと頭を寄せて 彼女の意志を読みとるように蛾を見詰めた。だが、彼はあの愛すべき妻が、事もあろうに 此の憐れな蛾の姿になつていと思うと、それはいかに愚かな彼自身の空想だと考えたとしても 涙を流さずにはおれなかった。彼は 蛾を掌の上に乗せながら妻の死の間際に云った言葉や 顔を思い出した。――

妻 「もう Y は一人ぼっちになるんだわ。私 が死んだら、もう Y の事をしてやるものが誰もないわ。」

よしあったとしても、無論 彼女のそれのようではないにちがいない。が、しかし、どうして彼女についての此の強烈な思い出が、かように自分を苦めるのか、と彼は考えた。いやそれよりも、彼は いかに自分と離れることを苦しがつたか 計り知れない妻の念力を感じると、

此のときこそ 掌の上の一疋の蛾が、無気味にひっそりとした
物音のように生き生きと妻の亡霊に感じられた。寔に此の一疋の蛾が、
寔に明らかに一疋の蛾であるに過ぎないと云い得るごとく、此一疋の蛾が、
寔に明かに妻ではないとどうして云い得ることが出来るであろう。――

◆女が訪ねて来て、蛾を怖がる。
◆ナレーター・彼・哲子・女

その次の夜、夜が深まるにつれて彼は蛾のことが気になり出した。彼は夜の深みの中でいつの間にか成り出した果実のような丸窓の黒い色を絶えず見た。蛾がもし彼の身邊に忍び込むとすれば、そこからちがいないことを明らかにするように、彼は周囲の襖や障子を閉めておいた。暫くすると、母屋から離れた静かな廊下の向うから人の足音が聞えて来た。

哲子 「Yさん、Yさん。」

彼 「はア。」

襖の向うから呼んだのは恩師の姪の哲子である。

哲子 「いらっしやるの。」

彼 「います。」

哲子 「あのね、」

彼 「ええ、」

哲子 「這入ってもいい？」

彼 「どうぞ。」

と彼は云った。

襖が開くと哲子はそわそわしながら近かよって来た。

哲子 「あのね、あなたにぜひ逢いたって云う方があるの。」

彼 「はア。」

哲子 「逢ってあげて下さいな。女の方よ。」

彼 「はア」

と彼は答えた。

哲子 「あなたに逢いたい逢いたいって云って、私 どうしようかと
思ったんだけど、あなた、逢って上げて下さいよ。」

彼 「誰ですか？」

と彼は訊いた。

哲子 「それが 私 もはっきりまだ訊かないの。まだ あなたに
逢ったことがないんですって、きつき 私、門の前にいたら、
あなたがいらっしやるかって訊くんでしょう。だから、私、
ついうっかりしていらっしやるって云っちゃったの。」

彼 「じゃ、逢いましょう。」

と彼は云った。

哲子 「そう。有り難いわ。じゃ 連れて来てよ。私、もしかしたら、
あなたにいけないかと思っただけで、美しい方なんですよ。」

彼女はそう云いながら、もう浮き浮きとして 廊下の方へ馳けて行った。

しかし、何ぜ彼女はあのようにな 彼に 女を逢わすことを
喜んでいるのだろうか、と彼は思った。

すると、不意に 彼の描いていた廊下の長さを渡って来る時間よりも
奇怪に早く、トントンと軽い足音が聞えて来た。実際それは
意外の早さで、彼がひと数えているときもう 事実は二の終りまで
進んでいると云った行動で、全くこれも不意に 襖がさつと開かれた。

しかし、これは 何と美しく青ざめた女だろう。——これは妻の
亡霊ではないかと また彼は思い出した。全く彼女は 妻と
似た形ではないとしても、蛾に変わり得る妻ならいずれ 彼女に
変わり得られる筈ではないか。——女は彼にお辞儀をした。

彼 「こちらへ、」

と彼は云った。

女は黙って畳の上に乗ると彼の顔を真直ぐに眺めていた。

彼 「何か僕に御用でもおありですか。」

と彼は訊いた。

女 「いいえ、あのう 私、ただお逢いしたかっただけですの。」

と女は云った。

彼 「そう、しかし、どうして僕がここにいるって云うことを

御存知だったんです？」

女 「私、あなたがきつとここにいらつしやると思いましたの。」

勿論、彼が此の恩師の家にいると云うこと位は、彼の近況を

想像すれば誰にでも直ぐ推定出来ることにちがいがなかった。

彼 「じゃ、あなたは僕の家内が亡くなったのを御存知ですね。」

女 「ええ、存じております。」

と女は答えた。

しかし、此の女が妻の亡霊ではないとどこをもつて考えるのか、

と彼は考えた。が、しかしまた此の女を妻の亡霊だと考えることは、

蛾を彼が妻だと思つたことより余りに奇怪を好みすぎた勝手な

考え方だと気がついた。

それにしても事件は不思議に彼の好みにあつた程度に感じて奇怪である。

もしも此の奇怪さを利用して女を妻だと決定的に思い得るなら、

これに越した楽しみはまたとあろうか――

彼は彼の想像力が、次第に眼前の女を妻だと強いても思い

得られるに完全な答えを女の挙動と言葉とから得たくなつた。

まったく彼が一疋の蛾を妻だと思ふことが出来たなら、あの蛾よりもはるかに完全に妻に似ている形の女を妻だと思ひ得られない筈がない。

彼 「あなたは僕の家内の死んだことを どうして御存知になつたんです？」

女 「私、あなたのお書きになつたものを拝見しましたの。」

彼 「ああ、」

と彼は頷いた。

これでは女がだんだんと彼の喜ばしき幻覚の中の妻の亡霊から遠のいて行くのは間もなくであった。彼は 傍の香炉の中で手なぐさみに香を焚いた。

彼 「あなたは。」

と彼は 何かを問いかけた。が、別に問う気ではなかつたのだと気がついた拍子に、

女 「え？」

と女は訊き返した。

彼 「いや、」

彼は 黙つて了つた。

女 「あなたの奥さまはお若くていらつしやいましたの？」

と女は訊いた。

彼 「ええ、二十一です。」

女 「あら。」

彼 「じゃ、あなたも？」

女 「ええ。」

彼 「なるほど。」

そう云う所が 確にある。

二人は 暫く黙っていた。

彼 「あなたは どこかお悪いんですか？」

と 彼は訊いた。

女 「ええ、もう 胸の方が。」

と 女は言っただま 下を向いた。

——これも 妻の 病気と同じではないか。

しかし、こうも 妻と同じだと云うことは、妻とは 全く別の 女だと云うことを 何故かくも 突如として 鮮明に感じますのか。彼は 彼女が 妻とのことを 読んで 彼に逢いたくなっ と思 気持ちは 直ぐ分る。

どこに 奇怪な 何物があるろう。しかし、今の 場合 奇怪ではないと云うことは

彼が 女を 妻だと思 得られない 確実な 事実を 想像し得たが 故であるろうか。

だが、それにしても 彼女は あまりに 青ざめて 美しすぎる。それは

夜の 花のように 絶えだえなものではない。どこか 愁麗な 夜の レールの

ように 青ざめて 光っている。此の 夜の 深まった 一室に 閉じ籠っている

男の 前に、不意に 鋭い 輝きをもって 現れた 敏捷な 女の 静けさは

いづれ 奇怪な 事実 に ちがいないのだ。

女 「まア、此の 部屋は どうして こう 風が 吹く んでしょう。」

と 暫くして 女は云った。

風が 吹く？ ——

彼 「どこに 風が 吹いて いる んです。」

女 「あら、こんなに 風が 吹いて いる じゃ ありませんか。」

彼 「風が？」

と 彼は云うと、はッと 耳を立てる ように 心を 立てて 部屋の中を見廻した。

しかし、彼には 風と云う風は 部屋のどこの隅にも吹いているとは思えなかった。ただ 香炉から昇る煙りが もの静かな煙のように 靡いているにすぎなかった。

彼は じつと身を沈めるようにして 女の顔を見詰めていた。すると、女は 眼を光らせながら身体を後ろに反らすと、自分の身邊を索るように 見廻した。

女 「まア、どうしたんでしよう。こんなに……」

彼 「風が？」

女 「ええ。」

彼 「不思議だ。」

彼は 自分の感覚を疑うべきか 女の感覚を軽蔑すべきかに迷い出した。 事實は 明らかに怪談ではない。それにも拘らず、此の風の有無について 此のように 驚きを感じるとは、これは何たる事であろう。果して 事實は 怪談であるのかないか。彼は この区別に朦朧としていると、

女 「あッ」

と 女は 悲鳴を上げて立ち上った。

見ると、一疋の蛾が 彼女の片手に払われて ぱたぱたと 畳の上で 藻掻いていた。

彼 「妻が来た。」

と彼は思った。

すると、蛾はまた 羽根で 畳を叩きながら しつこく女の足の方へ 進んでいった。

女 「あッ、あッ、」

と 女は けたたましい叫びを發して 部屋の片隅へ馳けすくんだ。

彼は蛾を掴んで捨てることが出来なかった。少くとも、女を妻だと思より蛾を妻だと強く思っている彼としては、その自分の妻を捨てて女を助けると云うことは出来なかった。と、女は蛾が彼女の足もとまで羽ばたきながら近か寄ったとき、急に襖を開けて部屋の外へ飛び出した。その瞬間、彼は女が悶絶するほどの恐怖を浮べてさッと振り廻された衣のように翻った姿を見た。

◆蛾はどこにでもいると考える。
◆ナレーター・彼

そのまま 女はもう再び彼の所へは来なかった。翌朝 彼はひとり
また旅に出た。彼は 前夜の不思議な女に関して、ただ 女が偶然にも
蛾に本能的な恐怖を持っていたにすぎないと、ごく平凡な解釈を下して
満足しようとした。

それなら、あの蛾は？

いや、夏だ、蛾ならどこの電灯の下にだっているにちがいない。

彼は 夜M町へ着くと、ホテルの日本間を借りて直ぐ仰向きに寝た。

彼は のびのびと両手を横に大きく拡げて出来るだけ大の字形に
なってみた。彼はもうそこから 出来ることなら動きたくはなかった。

しかし、もし本当に動かなくてすませるものなら、人の通らぬ野の
雑草の中へ頭を突っ込んで いつまでも倒れていたかった。

彼 「どんな不思議なことがあるろうとも、どんな奇怪なことが
あろうとも、それは一体自分にとってどうしたことだ。動くものは
動くが良い。廻るものは廻るが良い。」

彼は眼を瞑って 何事も考えまいとしていると、女中が夜の膳を
運んで来た。彼は起き上って 箸をとった。

彼 「とにかく、俺は 腹が空いて仕方がない。これだけは事実だ。」
彼は 膳に箸をつけようとして、ふと膳を見ると、また、一疋の蛾がじつと
膳の縁にとまったまま彼を見ていた。彼は 寒さを感じた。彼は 暫く
箸を持ったまま 動けなかった。

彼 「いや、夏だ、蛾はどこにだっているにちがいない。」

彼は
敢然として
刺身を口に投げ込んだ。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作など有名作家のあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 横光利一 『蛾はどこにでもいる』 Podcast 版

発行日 令和 2 年 11 月 1 日

著 者 横光利一

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

<https://gekidannono.com/>

radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。
現代仮名遣いに直しています。

底本 『定本 横光利一全集 第二巻』(河出書房新社)

初版 1926 (大正 15) 年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000168/card58573.html>



